

## 北海道・利尻岳登山（1721m）



期 日 2015年7月16日～20日

「洋上からの利尻岳」

参 加 石川誠・佳子

行 程

7/16日（木）晴れ

羽田 10:30-12:30 稚内 16:30 フェリー-18:10 利尻島鷺泊着 宿舎  
「みさき」泊

7/17日（金）晴れ

宿舎 5:00 発-5:10 北野野営場（3合目）-甘露泉-5合目 6:25-6合目 6:55-  
8合目（長官山）- 10:40 鳥海山北峰-11:15-13:10 八合目 13:05-第2見  
晴台 13:30 通過-登山口 17:00 着宿泊「みさき」泊

7/18日（土）晴れ

鷺泊からフェリー-9:25-10:05 香深着 10:45-バスでスコトン岬へ 11:47 岬  
着-12:00-13:15 ゴロタ山ゴロタの浜散策-鉄府神社 14:20-15:00 浜中バス  
で香深宿舎（泊）

7/19日（日）晴れ

礼文香深 8:40-フェリーで 10:35 稚内着-11:20 レンタカーで宗谷岬、猿払  
からサロベツ、原生花園、ノシャツプ岬-を一周し稚内市内宿舎へ

7/20（月）晴れ

午前中タクシーで稚内公園に行き冰雪の門、乙女の像、南極観測・樺太記  
念碑など見学しバスで稚内空港 13:15 発-14:55 羽田着、帰宅する。

利尻岳登山紀行 7月17日快晴

リシリの語源はアイヌ語のリ-（高い）シリ（島）からきているとのこと。

宿の車で北麓野営場まで送ってもらう。このキャンプ場は木立の中に整備されていた。此処から歩いて10分ほどで名水・甘露泉に到着、冷たい水が滾々と湧きだし、水を補給し出発する

暫らく針葉樹林体の中を鳥のさえずりを聞きながらのんびりと登って行く。高度を上げて行くと次第に風が強くなり、周りの笹や木々を揺らしている。五合目を過ぎ急登を登りきると6合目の第一展望台にたどり着く。しばし休憩し、七曲りの登山道を登り、第2見晴台。眼下には真っ青な利尻水道を隔てて礼文島が霞んで見える。ここからひと上り八合目の長官山に着く、頂上への稜線がすっきりとして、2本の雪渓が青空の中頂上突き上げている。少し行くと赤い屋根の避難小屋があった。途中沓形コーからの道を迎えて、火山砂利の歩きずらい道を登って行くと頂上の社が出迎えてくれた。頂上は天気も良く多くの登山者で賑わっている。

途中の風の強さではさぞ、頂上では烈風が吹いて困難するのではないかと危惧していたが風は八合目から下あたりを吹きぬけていた様で頂上は360度展望が利く中で無風快晴良い日に登頂できたものと感謝一杯である。

目の前には特異なローソク岩が聳え、眼下に大空沢が落ち込み、仙法志稜、沓形第三稜が見て取れる。冬は素晴らしいバリエーションとなるだろうことが容易に見て取れる。

ちなみに弟は、東斐山岳会の間庭氏、日大山岳部の三好氏等に連れられ若いころに5月合宿でこの仙法志稜の登攀でしごかれたと語っていたのを思い出した。

頂上からの下りは砂利道で油断していると足が取られ、注意しながら周りの花々や群青色の海を見ながら元来た道をのんびりと下っていった。至福の時間をたっぷり味わうことが出来た。

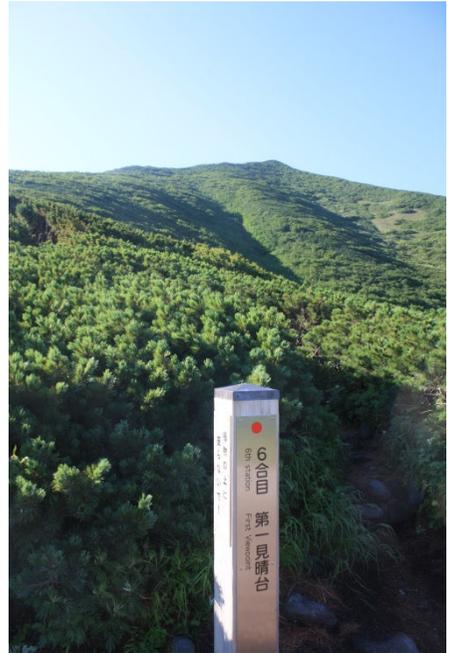
まあ、一度は来たかった最北の山利尻岳に膝痛を抱えながら登山出来たことに感謝する。当会の加藤氏らも冬の利尻に憧れ写真を撮りに来て、一瞬の晴れ間の中で良い写真を撮られている。

ちなみに昭和25年2月1日登歩溪流会の川上晃良氏が南稜から転進し、東稜から単独登頂されているのを聞いた時、戦後間もない時期に只々凄惨な人たちが居たものだと感じたのを思い出す。その後、同会の今井氏他2名、3名のサポート隊に支えられ、苦労の末昭和49年12月末から1月4日にかけて厳冬期利尻岳南稜を風雪の中完登している。谷川岳が近くて良い山ならば、この利尻岳は遠くて良い山と評され、冬の利尻はなかなか姿を見せず近寄り難い良い山と言われる所以であろう。

礼文アツモリソウや薄雪草は、季節外れとのことで残念ながら見る事が出来ず、機会を見つけてまた来たいものだ。



「甘露泉水」



「第一展望台から頂上を仰ぐ」



「展望台からの礼文島」



「長官山 1283m 」



「鵜泊港ペシ岬」



「避難小屋を見る」



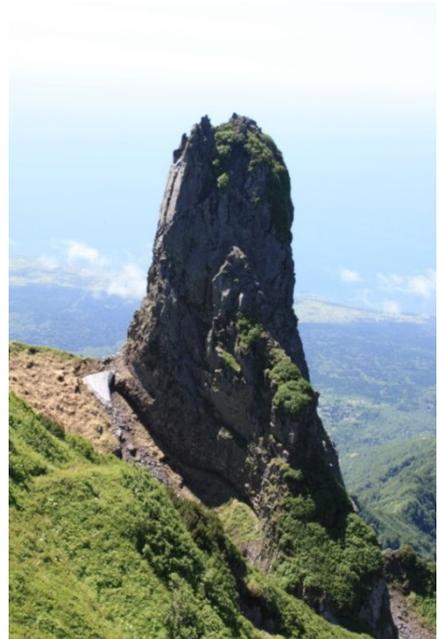
「長官山」



「雪渓が残る頂上を仰ぐ」



「快晴の中の鴛泊コースの稜線」



「顕著なローソク岩」



「快晴の中・利尻岳頂上で」



「利尻岳南峰とローソク岩」



「ローソク岩と仙法志稜・峯形三稜と大空沢」



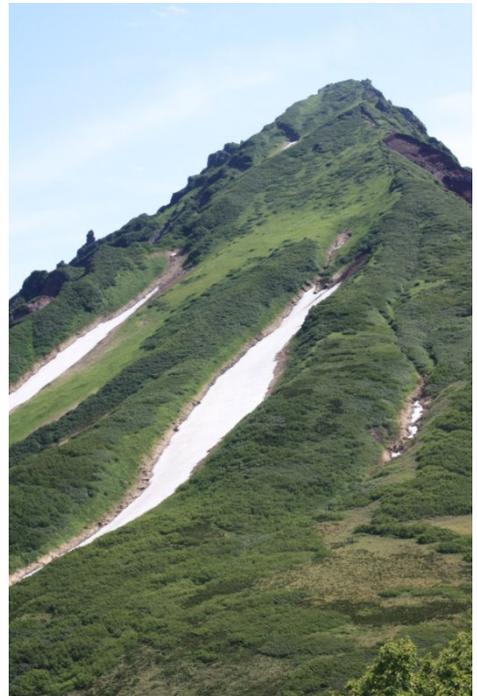
「エゾツツジ」



「ナントカギクか？」



「 頂上直下から脊形コースを分ける」



「青空に残雪が映える」



「 群青の利尻水道」



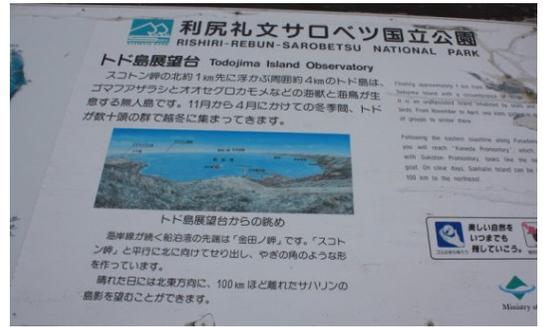
「エゾカワラナデシコ」



「礼文島からの利尻岳」



「礼文島・スコトン岬 後の島はトド島」



「サロベツ原野説明版」



「 礼文島ゴロ夕浜」



「花の説明版」



「 銭谷五兵衛の碑」



「サロベツ湿原センター」



「レブンシオガマ」



「礼文島ゴロタ浜」



「ゴロタ岬からの利尻岳」



「サロベツ原野からの利尻岳（ポスター）」



「サハリンを見つめる宗谷岬の間宮林蔵」



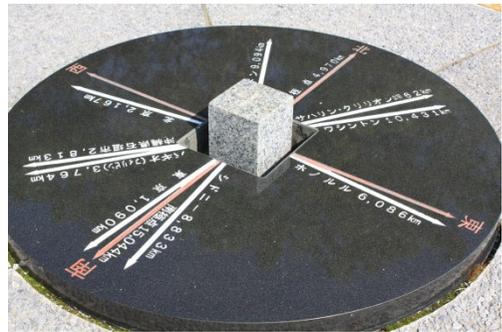
「開基百年記念塔」



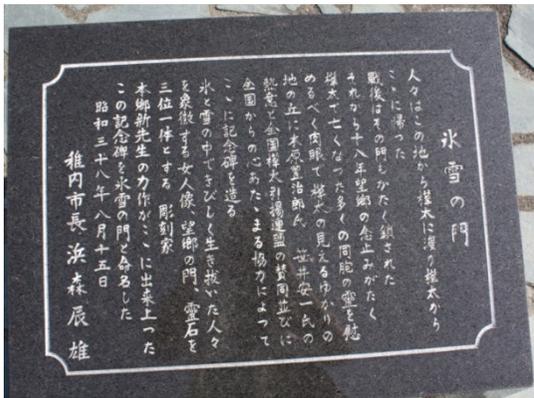
「氷雪の門（樺太島民慰霊碑）」



「教学の碑」



「方位盤」



「氷雪の門・説明版」



「樺太師範学校説明版」

## 教学の碑

稚内公園内にある記念碑です。樺太、「からふと」の名は、アイヌ語で「カムイ・カラ・プト・ヤ・モシリ」と呼んだ事に由来すると言う。アイヌ語で「神が河口に造った島」と言う意味だそうだ。

かつて樺太が日本の領土だった頃、南樺太に位置する豊原市（現コジノサハリンスク付近）には、樺太庁、豊原支庁が置かれ、1945（昭和20）年当時の人口は、約40万人で、主要な産業は漁業、農業、林業と製紙・パルプ、工業、石炭・石油の採掘業。

1939（昭和14）年、樺太の教員を養成する機関として樺太庁樺太師範学校が開校。

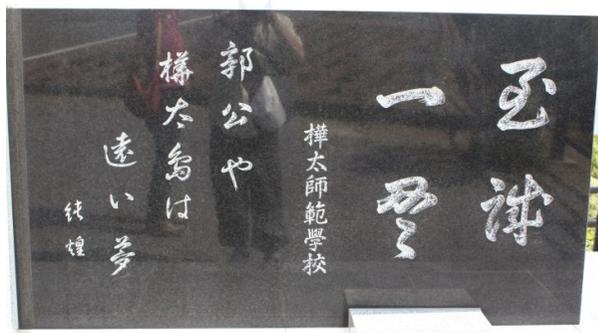
男女共学の実施は当時としては大変珍しかったそうです。

1945（昭和20）年に終戦（ソ連軍の侵攻）により閉校となった。

戦後、樺太師範学校の卒業生は北海道の小学校、中学校、高等学校等で教壇に立ち、北海道の教育を担っていた。1989（平成元年）年、同窓生900余名が開校50周年を記念し、樺太を望む稚内公園に記念碑を建立。裏には綺麗な花畑がありました。



「九人の乙女の碑」



「至誠一貫の碑」

終戦直後の昭和20年（1945年）8月20日、ソ連軍の侵攻の中にあつた樺太。その緊迫した状況の中、最後まで交換業務の任務を果たし、自らの命を絶つた樺太真岡郵便局の9人の若き女性交換手たちを慰霊しています。屏風状の碑には亡くなった9人の名前、交換手姿の乙女の像を刻んだレリーフ、そして彼女たちの最後の言葉「皆さん、これが最後です。さようなら、さようなら・・・」の文が刻まれています。

稚内公園内の代表的なモニュメント。異国となった樺太への望郷の念とそこでなくなった人々を慰めるため昭和38年に建立され、高さ8mの門の向こうにはサハリンの島影が浮かび上がる。

記録 石川 誠

### 礼文情歌 「利尻に渡るフェリーの中で聞く。」

- |   |   |   |
|---|---|---|
| 1 星が流れて荒海の<br>スコトン岬に消えた夜<br>利尻の山は見えないが<br>あすはヤマセも晴れるだろう<br>しづきに暮れる礼文島 | 2 千石場所も今は夢<br>昔を偲ぶ落書きは<br>ニシン大漁のハヤシうた<br>わく船磯に朽ち果てて<br>漁火恋し 礼文島 | 3 ゴメが群れ飛ぶ桃岩に<br>エーデルワイスの花が咲き<br>こぼれ陽 丘に指す頃に<br>去年の人は来るだろうか<br>恋にも遠き 礼文島 |
|---|---|---|